

此處まで到達するには我々孵化場のものがより以上の努力が必要でありまた此處まで行く様努力してこそ戦後限られた漁場によつて生活を維持する數多い漁民の生活向上を圖り、國民の要求する魚肉たんばく質の供給の資源を持続し、引いては國土經濟の再建を圖る



圖書紹介

調査課

今月は湖沼學の一書をあげてみる。

觀光地帯と云はれる地域は大低湖を中心に成立つてゐる。本道でも阿寒湖、洞爺湖、支笏湖等皆夫々の違つた趣をもつていて本邦は湖沼が多く水明の地と云はれるが摩周湖は入水口も出水口もない世界一透明度の高い湖である。こんな處に、と思はれる様な場所に湖があつたり沼が出て來たりするのも湖沼の成因の驚異であらう。

前世紀の終りから一つの纏つた學問としての湖沼學が生れた頃は、湖沼學はその成因とか簡単な湖水の性質とかが對稱となつて、湖沼内の生物とかその生産等

上からも捕獲、採卵、孵化を大にする事も大事であるが、一層今後は漁民と共に稚魚保護につとめる事が我々孵化場員の緊急事であると考へる。

(天塩支場徳志別事業場主任)

が後に至つて注目され始めたものであるが、現在では湖盆の形成等は一應論議し盡された形で、湖水の物理、化學的性質とそこに棲息する生物群聚の關係からそこに総合的なものとしての湖沼と云う見方が起つて來ている、之は學問的な發展経緯であるが人間生活との實際的なつながりとしてもマリモの保護が電源開發かと云う阿寒湖の場合ならずとも湖沼は更に一層利用される價值が見出されようとしており、所謂内水面として産業、經濟、文化に河川と共に湖沼の果す役割は無限である。

湖沼學 吉村信吉著

本書は創設以來日が浅いとは云へ本邦で湖沼學の發展に重要な業績を残された著者が、総合的なあらゆる面から湖沼を究明し理解しようとした熱意と努力からなる名著で本邦湖沼學の參考書としては既に古典的な定本とも云へるものである。

湖沼學の學問としての位置とその發達史を序論とし、續いて卷を二部に分けて第一部では湖盆の形態、湖水の物理化學的性質として湖沼の水文學、水力學、光學、熱學、化學、水に就て解説し、更に湖沼の群聚、湖底堆積物に及ぶ項目を一括して「湖沼學基礎論」としている。此處に湖沼群聚と云うのは湖中のプランクトン、昆虫、水草其の他の動植物一般をなした「生物群聚」の意である。

第二部に於て著者は湖沼の生産、湖沼中の物質循環、湖沼標式及其の分布を「綜合湖沼學」としてまとめてゐる。即ち湖沼をフオーブスの云う「小宇宙」或はフオーレルの云う「高度の有機體」としてみた場合、その生産、物質循環等から綜合的にその湖沼がどの様な類似の性質の種類に屬するかと云う「湖沼標式」を定めてその由來を究明するのが綜合湖沼學である、と云うのである。尙此處に云う「生産」と云うのは人間が湖沼を利用して行ふ淡水増殖等に云う生産ではなくて、一ネマンの定義をかりれば「ある生活空間に於る生産とは一定時間内にその場所で生じた生物並に分泌物の總量、即ち形成された有機物の總量」であらう。湖水中に起る物質循環がこの生産に影響することは當然で、そして之等が湖沼の人工的な増殖業を決定づける綜合的

な因子となる事も當然で、しかも或湖沼に此の様な人工的な手が入つたり或はそうでなくとも自然の影響で湖沼はその標式が變つて行くものであり、この變化を常にみつめてゐるのが當事者の任務である。

本文の終りには各項目別の文献を三九頁にわたつて掲げてある。研究方法の技術面をも知らうとする人には好箇の手がかりである。附録として湖水の化學分析方法とその文献、湖盆形態表、日本の主要湖沼、最後に湖沼學に於ける主要業績として、湖沼學がどの様な人達によりどう發達して來たかを簡単に年表形式であげてゐる。

(昭和十二年 三省堂發行 六九五頁)

(擔當 坂野)

